



編集・発行

国立大学法人鹿児島大学男女共同参画推進センター 〒890-8580 鹿児島市郡元1-21-24

TEL 099-285-3012 E-mail: gender@kuas.kagoshima-u.ac.jp <https://www.kagoshima-u.ac.jp/atsuhime/>

■ご挨拶 男女共同参画推進センター副センター長 増田 美奈（鹿児島大学病院女性医師等支援センター）

前年度に引き続き男女共同参画推進センター副センター長を拝命しました増田美奈と申します。

私が所属する鹿児島大学病院は、高度・先進医療を担う地域中核的医療機関としての使命を持ち、臨床診療業務や若き医療人の育成・教育、そして研究に取り組んでおります。教職員における女性比率は62.7%（2019年学校基本調査より）、研修医、社会人博士課程の学生など、性別に関わらず妊娠、育児・介護等のライフイベント期にある方は多く含まれます。その為、研究支援員制度やメンター制度は、キャリア継続の上の大きな支援、精神的な支柱となっています。

その一方で、病院としての公益性や業務量の多さから、ワーク・ライフ・バランスが一朝一夕には進まないことが課題であり、働きやすく学びやすい環境作りのため、今後も一層男女共同参画を推進していきたいと思っております。ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



■セミナー開催

男女共同参画トップセミナー



藤井良一氏（大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構長）を講師にお迎えし、令和元年7月31日に男女共同参画トップセミナーを開催しました。セミナーには、佐野輝学長をはじめ役員、教職員等77人が参加しました。

「大学における女性リーダー育成の重要性とその方策事例について」と題した講演では、本学的女性研究者研究活動支援事業採択期間前後の男女共同参画の状況変化や助教と大学院生の女性数の増に係る相関関係等をグラフにより示され、本学の今後の女性研究者増に向けた検討の方向性へのアドバイスがなされた後、男女の研究力はその差がないことや名古屋大学の女性リーダー育成の取組事例と課題の紹介がなされました。また、アテナ・スワン憲章

等の国際的な男女共同参画の評価指標による取組から、日本においても、それを意識して取り組んでいくことが女性活躍やダイバーシティの促進、組織の活性化につながるとし、どんな小さなことでも、今実行していくことが大切だとの講話がありました。

講演後、女性リーダー育成におけるライフイベント期の支援について質問が出され、講師から、分野を超えて女性のネットワークを作り、情報共有したり要望を提出したりすることや、ワーク・ライフ・バランスが取れるような会議時間の設定等の組織としてのあり方等のアドバイスがありました。

また、事例として紹介された名古屋大学のPI育成について、継続的な実施においては学長の強いリーダーシップと各部署が環境を用意する必要性とともに、そのことが優秀な女性の採用につながると伝えられました。

事後アンケートには、「目標設定だけでなくシステムを構築し、長期的戦略として推進する必要がある」等の意見の記載があり、本学的女性リーダーの育成に向けた意識改革として、大変有用な機会となりました。



介護支援セミナー・相談会

鹿児島市地域包括支援センターの山田一貴氏（介護支援専門員、認知症地域支援推進員）を講師として、令和元年8月29日に介護セミナーを開催し、学生を含む12人が参加しました。

講師から、認知症を引き起こす主な病気や具体的な支援方法などについての話と相談先の紹介等がなされ、家族の介護を担う場合だけでなく、自分自身や身近な人の認知症症状への気づきや支援方法等を学ぶ大変有用な機会となりました。

本セミナーは2年前から「認知症サポーター養成講座」を兼ねて実施してきており、認知症サポーターが増えることは、職場における認知症の理解や介護との両立などについての環境整備につながっています。

セミナー後の相談会では、2人から相談があり、山田氏と平山真也氏（介護支援専門員）から、個別に、制度の利用や支援の仕方等のアドバイスがありました。



女性リーダー育成セミナー

令和元年9月25日に、鹿児島市学習会講師派遣事業を活用し、女性リーダー育成セミナーを開催しました。講師の立元昭子氏（A-cube株式会社 代表取締役会長）による講演及びワークショップに、学内各部署からの推薦者等35人が参加しました。

講演は「チームを活性化するリーダーに求められる役割」と題して、女性管理職が少ない現状とその理由、周囲が望ましいと思う資質に性別により違いがあること等について説明があり、リーダーのコミュニケーション力がチームの活性化に重要であるとの話がありました。

ワークショップ「理想の職場・リーダー像と自分の強み」では、理想のリーダー像に各人の持つ強みをどう活かしていくか等について、活発な意見交換がなされました。事後アンケートには、「給与などの外発的動機付けだけではモチベーションは上がらないことや、働きやすいと思えるコミュニケーションが大切であることが分かった」「自分の弱みだと思っていたことは、捉え方では強みにもなることが分かり、少し気が楽になった」などの感想があり、リーダーへの意識の変化が見えた有用な機会となりました。



ワークショップの様子

■学内連携

出前授業「研究者への道」

令和元年7月26日に、鹿児島県立加世田高等学校で、山下和香代助教（理工学研究科 情報生体システム工学専攻）が、進路選択や研究者キャリア、ライフイベントとの両立、研究内容等を披露しました。

生徒からは、乳幼児の視覚に関する研究が玩具作りに活かされていることや山下先生自身が育児中であることなどから、「研究を身近に感じた」「工学系分野の多様さや生活とのつながりが分かった」「育児との両立支援が大学にあることがいいなと思った」などの感想がありました。



附属図書館連携企画「男女共同参画展」

附属図書館1階エントランスにて、令和元年10月7日から12月13日まで、男女共同参画に関する図書200冊の展示・貸出と、男女共同参画の取組のポスター等の展示を行っています。

関連本は、国立女性教育会館から借用しており、後期共通教育科目「男女共同参画社会」の受講者間でお勧め本を紹介し合うなどし、授業支援教材としても活用することとしています。



■学外連携

第11回九州・沖縄アイランド女性研究者支援シンポジウム in 福岡

令和元年9月20日に、九州大学伊都キャンパス椎木講堂コンサートホールにて、「女性の活躍推進に向けて～支援から戦略へ～」をテーマにシンポジウムが開催され、本学からは、総務担当理事・副学長及び男女共同参画推進センター関係職員が参加しました。

1部は、上野千鶴子氏（東京大学名誉教授・認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク理事長）による基調講演「男女共同参画は学問を変えるか」があり、2部は、伊東昌子氏（放送大学長崎学習センター所長）のコーディネートにより、九州・沖縄アイランド女性研究者支援ネットワーク参加機関の男女共同参画やダーバシティ推進担当理事・副学長が登壇し、「支援から戦略へ～組織と個人に必要なこと～」をテーマに、パネルディスカッションがありました。

基調講演では、上野氏から、日本の男女平等の施策は実態に伴っていないことや国が掲げている202030は達成困難である等の男女共同参画の現状について説明がありました。また、女性研究者はマイノリティの立場である一方で優秀な研究成果を出しており、採用を公募制とし、選考の透明性を確保することで自ずと女性が増えるとの見解を示されました。最後に、女性の参加や女性を増やすことは、社会的公正や効率化のためだけでなく、弱者に寄り添い非暴力を学ぶ実践を男女で共に分かち合うこと、持続可能で安心安全な社会を作るために必要であり、男女共同参画を社会変革の手段として「弱者が弱者のまま尊重される社会を」というメッセージがありました。

パネルディスカッション前半は、「女性研究者の上位職への登用」について、九州大学等6機関からの取組紹介後、「女性教員の上位職を増やすために必要なこと」について議論がなされ、コメンテーターの山村康子氏（科学技術振興機構プログラム主管）と上野氏からは、上位職への女性の育成とトップの姿勢の必要性、取組のインパクト評価の必要性、アカデミックエイジを導入するなどのレイトスター研究者への年齢差別解消の必要性の指摘がありました。

後半は、「女性研究者の次世代の育成」をテーマに福岡女子大学等5機関の取組紹介があり、本学からは、越塩俊介理事・副学長（総務担当）が登壇し、女子中高生向け理系進路選択支援プログラム「かごしま☆科学のタネまぎ塾～育て！未来の理系女子～」を紹介しました。研究職を選んでもらえるような大学における環境整備の重要性等について議論がなされ、コメンテーターからは、学生に研究者の現状を正しく伝える必要性が指摘されました。

最後に、「組織の成長に欠かせない人材として女性の登用を加速しましょう」「女性の活躍によりイノベティブで持続可能な社会の再構築を目指しましょう」との「令和宣言」が読み上げられ、満場の拍手で採択されました。



■総合研究学系における男女共同参画の推進



「総合研究学系における男女共同参画の現状と将来の方向性」

馬場 昌範 理事・副学長（研究・国際担当）、総合研究学系長
ヒトレトロウイルス学共同研究センター長

総合研究学系は、医用ミニブタ・先端医療開発研究センター、国際島嶼教育研究センター、研究支援センター、産学・地域共創センター、地震火山地域防災センター、そしてヒトレトロウイルス学共同研究センターからなる教員組織です。これまで医歯学域医学系に属していた難治ウイルス病態制御研究センターが、2019年4月に熊本大学エイズ学研究センターと総合されて、ヒトレトロウイルス学共同研究センター・鹿児島大学キャンパスとなったことにより、教員組織も総合研究学系所属へと変更になりました。

男女共同参画の観点から言えば、今年の4月現在で女性専任教員の比率が1/3を超えている総合教育学系と比較して、総合研究学系はあまりにも少ないとしか言いようがありません。9月の時点において、総合研究学系の専任教員は18名ですが、そのうちの女性教員はわずかに1名（5.6%）です。特任教員についても、総数14名のうちの女性教員は2名（14.3%）となっています。また、3名の女性教員のうち2名はヒトレトロウイルス学共同研究センターの教員です。総合研究学系に属する各センターは、本学でも独自のユニークなミッションを持った理系のセンターであり、これが女性研究者の少ない主な理由であると思われます。

このような現状を改善するために、学系全体として何をしていくべきかを考える必要があります。幸いなことに、教員以外のスタッフ（特任研究員や技術職員）もかなりの数が本学系に所属しており、それらを総合した形で、女性スタッフの数を少しずつ増やしていく努力をすべきであると思っています。加えて、2年前にスタートした大学院医歯学総合研究科、共同獣医学部、そしてヒトレトロウイルス学共同研究センターの女性研究者による、「鹿児島大学Women in Science for Health (WiSH) ワーキンググループ」のような試み*を、総合研究学系としても考えていきたいと思っています。

ダイバーシティ研究環境を目指して

鹿児島大学 Women in Science for Health (WiSH) ワーキンググループ

- 鹿児島大学理系女性教員および URA から構成。
- 学部・専門の枠を超えたライフサイエンス分野における共同研究体制の構築による鹿児島大学の研究力の向上に寄与。
- 男女共同参画推進センターとともに若手・女性研究者支援体制の充実を図る。

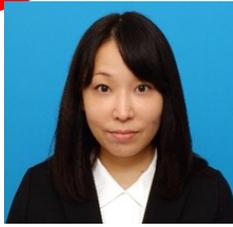


国際シンポジウムの開催 (2019.2.28)

- 国際的に活躍している女性研究者による特別講演。
- 甲斐知恵子教授（東京大学）、邢 惠琴教授（厦門大学：中国）をシンポジストとして招聘。
- 鹿児島大学の若手研究者および外国人留学生によるパネルディスカッション。

*参考：女性・若手研究者国際シンポジウムin鹿児島大学（男女共同参画推進センターNewsletter特別号）
URL: https://www.kagoshima-u.ac.jp/atsume/Newsletter_special_201903%20.pdf

鹿大の女性研究者に Close-up!



岡本 実佳 ヒトレトロウイルス学共同研究センター
抗ウイルス化学療法学研究室 准教授

1997年3月 鹿児島大学大学院医学研究科修了
1997年5月 鹿児島大学医学部附属難治性ウイルス疾患研究センター 非常勤研究員
2000年5月 ルーバンカトリック大学レガ医学研究所（ベルギー国） 客員研究員
2001年5月 鹿児島大学医学部附属難治性ウイルス疾患研究センター 助手
2002年1月 Medical Research Council Laboratory of Molecular Biology（英国） 客員研究員
2006年4月 鹿児島大学医学部附属難治性ウイルス疾患研究センター 講師
2013年4月 鹿児島大学歯学総合研究科附属難治ウイルス病態制御研究センター 准教授
2019年4月 ヒトレトロウイルス学共同研究センター 鹿児島大学キャンパス 准教授

★モットーは何ですか？

「人事を尽くして天命を待つ」「渡る世間に鬼はない」「人間万事塞翁が馬」

★研究テーマは何ですか？

HIV-1感染症の新規治療法の研究を行っています。最近では、エイズ遺伝子治療法に関する産学官共同研究を行い、ペンシルベニア大学での第Ⅰ相臨床試験実施に至りました。また、HIV-1感染症の根治療法の研究において、HIV-1感染細胞特異的な殺傷効果を有する薬剤を発見し、米国特許を取得しました。

★研究者を目指した理由を教えてください。

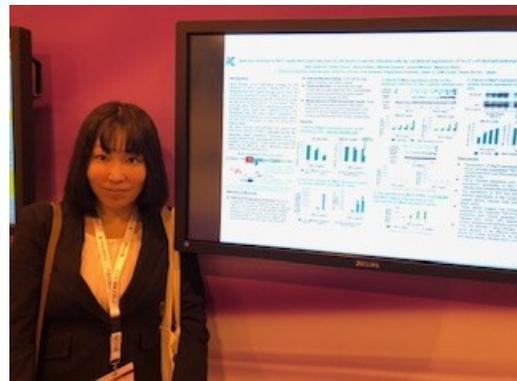
医学部卒業後、大学院に進み、同時に大学病院で医師として働きました。多くの難病の患者さんが懸命な治療の甲斐なく亡くられる中で、難病の治療法の研究をしたいと次第に思うようになりました。その頃、鹿児島大学の教授になられた馬場昌範先生に、大学院生として受け入れていただき、臨床から基礎研究の道に進みました。

★研究の上で苦労されたことはありますか？

上原生命科学記念財団より留学助成を得て、ルーバンカトリック大学レガ医学研究所へ留学しましたが、研究費の少ない研究室に配属されたため、大変苦労しました。最初は途方に暮れるばかりでしたが、腹を括って拙い英語で交渉し、また、少ない実験材料でも出来る実験を考え行うなどして、何とか研究を進めました。

★これから研究者をめざそうとする人へのメッセージ

研究者は誰にでもお勧めはできません。しかし、研究アイデアを検証出来た時の達成感他では得られないものです。また、知識欲を満足させ、常に新しいことを追求するため飽きることがありません。このようなことに魅力を感じる方には是非、研究者として活躍していただきたいと思います。



第28回欧州臨床微生物学感染症会議（2018年）
ポスター発表

■学外連携（地域）

鹿児島県女性活躍推進会議

女性はその個性と能力を十分に発揮して活躍し、男女がともに安心して生き生きと働くことができる「鹿児島」の実現を目指して設置されている会議で、当センター長が委員として参画しています。

令和元年度第1回会議には増田美奈男女共同参画推進センター副センター長（鹿児島大学病院特例講師）が、第2回会議には、渡部由香同副センター長（農獣医学域農学系准教授）が出席し、鹿児島県女性活躍推進に向けた事業についての意見交換等がなされました。

鹿児島県男女共同参画審議会

県の男女共同参画の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進に資するため設置されている会議で、令和元年の会議に、越塩俊介センター長（理事・副学長：総務担当）が委員として出席しました。

会議では、第2次鹿児島県男女共同参画基本計画総括評価や第3次鹿児島県男女共同参画基本計画の関連施策等について審議され、男女共同参画事業実施に対する人的・財源的資源の確保の必要性、共生社会での男女共同参画の視点の重要性等の意見交換がなされました。

Information

■大学入試センター試験時保育支援について

本学の乳幼児や学童を持つ教職員（非常勤職員含）が大学入試センター試験時に試験監督等に従事する際の保育支援を実施します。

■科研費にかかる保育支援情報

補助事業に関連した研究集会を主催する場合、会場内への託児施設設置に係る費用や、土日開催や宿泊を要する学会・研究集会等への参加に際し臨時的に必要となる託児料（休日保育や夜間保育に係る費用）については、研究遂行上必要性のある場合に限り、直接経費で支出することが可能です。

執行の詳細については、各部局の会計担当係へお問い合わせください。

<今後の予定>

大学入試センター試験時保育支援
*追試験日

令和2年1月18~19日
1月25~26日

鹿児島市サンエールフェスタ 2020

令和2年1月19~26日

